

JICA シニアボランティア

千葉

SVニュース千葉 第24号

2016年3月14日発行

千葉県JICAシニアボランティアの会
sakai_japan_tunisia_0511@yahoo.co.jp

本号目次

特別寄稿	1
公開講演会報告	2
帰国報告会報告	3
出前講座の充実に 向けて	4
出前講座報告	5-7
任国事情 ヨルダン ブラジル ニカラガ	8-10
フェスティバル報告 新国際クイズ紹介	10-11
ウェブマスターより	11
お知らせ、他	12

第20回公開講演会・平成27年度定例会を開催

平成27年12月5日(土) 13時半より、浦安市国際センターで、当会主催、JICA東京センター・浦安市国際センター共催による第20回公開講演会を開催しました。講師に元JICAシニア海外ボランティアで中央アジア人文地理研究家の多田碩佳氏をお招きして「茶馬古道に行く」のタイトルで2時間余のご講演をいただきました。講演会のレポートは本誌の2ページをご覧ください。

引き続き同会場で15時45分より平成27年度定例会を開催しました。来賓のJICA東京センター地域連携課課長 佐藤 俊也氏、浦安市国際センター長 松本 マツノ氏からご挨拶をいただき、担当役員から上半期の活動状況と会員動向の報告があり、下半期の活動について討議を行いました。参加した28名の会員から活発な質問と今後の活動の指針となる提言がありました。



青年海外協力隊発足50周年記念表彰で記念盾を受領

11月17日(火)、JICA横浜で「青年海外協力隊発足50周年記念表彰」が行われ、当会より及川 淳一初代会長、品川 洋之助 第2代会長、酒井 國彦 現会長が出席し、国際協力機構(JICA) 堂道 英明副理事長より記念盾を受領しました。

同日午後、天皇皇后両陛下ご臨席のもとに記念式典が行われました。「感謝そして未来へ」のテーマにふさわしい青年海外協力隊の若さにあふれる催しでした。



出席した当会歴代会長 左より、品川第2代会長、酒井現会長、及川初代会長

特別寄稿

「青年海外協力隊事業50周年にあたって」

JICA東京国際センター地域連携課課長 佐藤 俊也



JICA東京地域連携課の課長をしております、佐藤 俊也です。平素より、千葉県JICAシニアボランティアの会様にはお世話になっております。

さて皆様ご存知かと存じますが、1965年に発足した青年海外協力隊事業が今年50周年を迎えたのを記念し、11月にパシフィコ横浜において、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、また約4,500名の関係者のご参加を頂きつつ、記念式典を開催致しました。またシニア海外ボランティアは、1990年に発足致しましたので、今年で25周年を迎える事となります。

青年海外協力隊・シニア海外ボランティアは、現在まで併せて

約4万8千人の方がご参加され、JICAボランティア事業の3つの目的である、①開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、②友好親善・相互理解の深化、③国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元、にご協力を頂いております。この事業において、これだけの長期間、また人数を派遣出来た、という事は、将に市民の皆様によるボランティア事業へのご理解・ご協力の賜物と強く感じております。引き続き、ご支援をお願い出来れば幸いです。

千葉県JICAシニアボランティアの会様におかれましては、ボランティア事業の広報・参加促進・関心層の拡大、またボランティア経験の社会還元等、本事業の理解促進にご協力を頂いている事に関し、厚く御礼申し上げますと共に、引き続きご支援・ご協力を賜りたくお願い致します。

第20回公開講演会 「茶馬古道を行く」 (報告)

講師：中央アジア人文地理研究家 元JICAシニアボランティア 多田 碩佳氏

12月5日(土) 13:30~15:45、浦安市国際交流センターで第20回公開講演会を開催しました。今回は中央アジア人文地理研究家の多田 碩佳氏を講師にお招きして、「茶馬古道を行く」と題して2時間の講演をいただきました。多田氏は元JICAシニア海外ボランティアとしてタイと中国に派遣されたご経験があり、中国ではコンピューターのシステムデザインを指導するかたわら、各地を旅行して風物や人々の暮らしにふれ、写真家としても中国民族摄影会会員として活躍されました。



講演中の多田 碩佳氏

講演会は当会酒井 國彦会長の開会挨拶に続き、共催のJICA東京国際センター地域連携課課長 佐藤 俊也氏、浦安市国際センター センター長 松本 マツノ氏より夫々ご挨拶をいただき、当会 及川 淳一副会長の講師紹介によって開講しました。会場は70名を超える参加者で埋まり、会場の予備椅子を総動員しての大盛況となりました。

茶馬古道はチベットの馬と雲南の茶が行き交った交易路で、福井県武生市(現越前市)出身の多田氏は、中国のこの地域の古村や古鎮の風景が故郷に似ていることが茶馬古道に深くかかわる契機となったと語り起こしました。茶の歴史は4000年前



今も続く茶馬古道 撮影：多田 碩佳氏

まで遡り、その頃は茶の葉を漬物にして食べていたようで、その習慣は今も中国南部からタイ、ミャンマー北部で続いています。茶を乾燥させて湯を注ぎ飲料として用いられるようになったのは2000年前からで、640年に唐の太宗が王女の文成公主をチベット王に嫁がせた際に飲茶の習慣がチベットにもたらされ、ビタミン源としての茶の価値が認められ、その交易路として茶馬古道が確立したようです。

茶にまつわる講師の蘊蓄は奥が深く、写真を駆使してのお話や持参された茶製品の現物を見て、我々の茶についての知識とイメージが覆されました。樹齢千年を超える茶の巨木に驚き、蒸した茶を踏み固めて成型した餅茶や、地中で発酵させて酸茶を作る道具の竹筒に目を見張り、プロの写真家ならではの奥深い写真の説得力に引き込まれ、予定の2時間はあっという間に過ぎてしまいました。講師にはまだ語り足りないことがあり、参加者からの質問も止まりませんでした。講演会に続いて当会の定例会の開催を予定していたため、15時45分で終了とさせていただきます。また多田講師より写真集「古鎮の光と風」をご寄贈いただき、会場で希望者に配布されました。

当会の公開講演会は、これまで国際協力に関する公共機関や団体から講師をお招きすることが多かったのですが、今回は中国文化に深い造詣を持つJICAシニア海外ボランティアOBに講師をお願いすることが出来、当会ならではの公開講演会となりました。今後も同様の機会を増やして行ければと考えております。

(報告者：千葉県JICAシニアボランティアの会 白鳥貞夫)



70名を超える参加者で満員の会場

第20回帰国報告会を開催

2月25日（木）13:30～16:40、第20回帰国報告会を柏市のアミューズ柏で開催しました。今回は会場の都合で平日の開催となりましたが、一般市民を含めて57名の参加があり、充実した報告会となりました。

柏市での帰国報告会開催は6回目を迎え、今回は平日開催でしたが前回に近い参加者があり、一般市民の関心と期待が感じられました。報告会は定刻の1時半に村田幹事の司会で開会し、当会酒井会長の挨拶に続いて、来賓のJICA 東京国際センター地域連携課 加藤 眞佐美氏（写真）にご挨拶いただき、帰国者の報告に移りました。報告会の様子は地元ケーブルテレビのJ:COMが取材し、翌日夕刻のニュースで放映されました。



各報告の紹介

三輪 達雄氏 「ブータン王国から見た幸せとは」

人口約70万人のブータンは、国民の敬愛を集める国王のもと、国民総幸福度（Gross National Happiness）向上の理想を高く掲げ、伝統と自然との共存を図りつつ、なだらかな経済発展を志向している。先進国は汚職のないクリーンなブータンに競って援助供与し、その額は国家収入の1/3を占める。ブータンは経済自立の方策として協同組合の確立・充実を目指している。国連も2012年を「国際協同組合年」と定め、次世代の経済システムとして協同組合の普及を推進している。2012年4月から2年間の活動は、農家組織の実態調査、セミナー、有機栽培農産物の生産履歴追跡システム提案、アンテナショップ立ち上げ、協同組合連合会設立のアドバイス等広範にわたった。



そんなブータンにも、若者の失業率増加や薬物使用の潜行等、問題がないわけではない。しかし豊かな自然を守り、富を増やして幸福を求めるのではなく、欲望を抑えて幸福を求めるという思想は、水戸光圀の「吾、唯、足るを知る」に通ずるものがある。

黒須 英典氏 「メキシコでの工業高校での指導と生活事情」

メキシコは米国向け自動車製造拠点として発展し、今後も新たな工場の進出が見込まれ、若年層の産業人材養成の場として工業高校の充実が求められている。2012年4月から3年間、メキシコシティ郊外のCetis6工業高校（生徒数1100人）で適正製造基準の指導を行い、日本で確立された「5S、品質管理、



改善、安全」に焦点を当てて教員を育成した。

メキシコシティは標高2250mの火山湖を埋め立てたアステカの都からスペイン時代を経て、人口2千万の巨大都市に発展した。銃社会での安全は自分で守るしかないが、世界遺産になった伝統食文化やカラフルな宗教行事など、多種多様に楽しむことができる。日本との関係では、1609年に千葉御宿海岸でフィリピン総督一行の座礁難破救助に始まり、19世紀末の榎本移民団による移民時代を経て、現在は日本企業679社が拠点を持つ。

浦木 仁氏 「チリの企業指導と文化の差異」

2013年3月から2年間、首都サンチアゴ郊外のサン・ベルナルド企業組合で中小・零細企業に、日本式改善技術による生産性向上を指導した。チリ人は他のラテン系中南米人に比べて真面目で合理的な性格が強く見られ、日本のラジオ体操の定着や職場安全運動の導入もあり、指導した半数の企業が自主的に改善活動を進め



られるレベルに達した。これらの関連技術説明資料は2言語併記で200ページの資料にまとめ、成果物として残すことが出来た。

メキシコでも同じ指導を行った経験があるが、両国の国民性や習慣の違いを強く感じた。万事ざっくばらんでルーズなメキシコでの経験をもとに、チリでも改善の宿題を出したら、完璧に出来ないし次に進めないと思い込まれて敬遠されてしまったが、「今指摘した事は来年出来るようになればよい」と言い換えると、指導依頼が増加した。生活面でも、メキシコは大家族的で宗教行事も頻繁に行われ、交通規則も有って無きが如しだが、チリは核家族で宗教行事も最小限で、交通ルールもしっかり守られている。夫々の特質を良く理解して対処することが活動の出発点である。

出前講座の充実に向けて

当会は、出前講座を会員の海外ボランティア体験を社会に還元する重要な活動の場と位置付け、直近の3年間では79件の講座を行い、約4,000名の千葉県民に受講していただきました。今後もこの活動を更に充実させて行くため、10月に講師登録の内容を改訂して会員に再登録を呼びかけ、登録者を対象として2月に研修会を行いました。

講師登録

講座を実りあるものとするには、依頼者が期待する講話の内容と、講師を務める会員の経験や伝えたいテーマをマッチさせて派遣することが必須との認識に立ち、会員に講師登録を呼びかけたところ、27名から登録書の提出がありました。登録内容は、海外ボラ

ンティア経験の詳細、希望する受講対象者（シニア、小中学生、大学生等）、講演の概要、講演で特に伝えたいテーマ等です。このデータベースを基に、講師派遣のご依頼を受けた際は、ご要望をよくお聞きして、適任の人材をご推薦したいと考えております。今後も会員から随時登録を受け付けて更新してまいります。

講師研修会

2月6日（土）午後、千葉県コンベンションビュロー会議室（海浜幕張）で講師登録者の研修会を行い、17名が参加しました。今回は会員3名が講師となり、夫々講演をより魅力的にする上で留意しているポイントや手法を披露し、参加者が議論を深めて、講師団としてのレベルアップを計る機会となりました。

冒頭に酒井 國彦会長が基調として講師の心構えを述べ、次に白鳥 貞夫会員が「PowerPointを効果的に使う」のテーマで、見やすくアピール力のあるプレゼン画面を作るスキルを紹介しました。基礎知識として ①パソコンとプロジェクターの接続、②画面の解像度・縦横比、③デジタル写真の特性、④作業性を向上させる設定、⑤ショートカットの活用を説明し、実践技術として ⑥フォント、フォントサイズ、行間、文字間隔、⑦写真の効果的な見せ方、⑧アニメーション機能を応用した演出効果アップ、を具体例を示しながら説明しました。

次に「魅力ある講座の構成と進め方」をテーマに、川奈部 くに子会員が「出前講座を頼まれたら」と題して発表しました。①依頼者との事前打合せが重要で、②テーマを明確にして講演タイトルを決め、③飽きさせないために聞き手の参加を促し、④説得力のある資料として、新聞記事、ウェブ、JICA提供の資料を活用し、⑤現地の産品や衣装を展示して親近感を演出することも有

効で、⑥講演はやりっぱなしでなく、必ずフィードバックを求めることが重要、と強調しました。

最後に中村 時夫会員が、学生・生徒向け講座を成功させる秘訣を披露しました。①授業に先立って質問シートで課題を与え、問題意識を呼び起こしておくことから始まり、②講義では先ずジョークで雰囲気や和らげ、③質問シートの項目毎に回答者を指名して対話しながら基本知識を確認し、④要点が相手の腑に落ちるように対話をリードし、⑤意見を問うことで思考を深めさせ、⑥講義の終わりに受講者自らが講義内容を整理する機会を与える、というベテラン教育者ならではの手法を実演しました。

講義後のパネルディスカッションでは、参加者の出前講座への思いや、今後の取り組みについての意見が交わされました。閉会後に近くのバブに場を移しての活発な懇談を含め、初めての研修会は期待した以上に充実した内容になり、今後も講師研修を重ねて当会の出前講座の質的向上に努めたいと思いました。

講習会に参加した会員のコメント（抜粋）

- ・ マルチメディアを駆使した教材の作成、講義法の極意（導入から定着に至る過程の組み立てと話題・話術）など、受講者との共感を構築するヒントに満ちた研修内容だった。社会変化に柔軟に対応すべく自己進化に取り組む気概で参加したが、今後も気軽な研修会で切磋琢磨していいのではないかと。（K.K.）
- ・ 受講者の層に合わせた研修内容の選定と進行の仕方の工夫が重要で、興味をひく内容を吟味し、目で訴え、手で触らせ、話題を一緒に考え、遠い外国の途上国が身近に感じられるように、参加型の講座を作ってゆく上でとても参考になった。（M.K.）
- ・ 出前講座をしたことがないので、経験の発信方法を学ぶため研修会に出席した。3人の講師のプレゼンから感じたことは、聞く相手の興味や集中を継続させるように、いろいろな手法を駆使して相手に訴える発表をする工夫と熱意。聞く立場を十分考慮し、相手の五感を満遍なく刺激することによって、充実したプレゼンができるようになった。（H.U.）



講師研修会の模様

出前講座実施報告 (2015年9月～2016年2月)

柏市学校訪問事業：柏市役所地域づくり推進部協働推進課が中心となって、柏市立小学校の高学年を対象とした異文化教育を推進する「学校訪問事業」が行われています。4年目の本年は当会が以下の3校で授業を担当しました。

柏市立酒井根東小学校

9月24日(木) 講師 加藤 哲男 会員

第1回目は酒井根東小学校6年生94名を対象に行われ、アラビヤ風の衣装で登場した加藤会員は、「シリア 平和から内戦へ」と題して重いテーマを生徒たちに投げかけました。

まず、なぜ退職後に海外ボランティアとして活動したかを語り、シリアでの業務を紹介しました。本論では、平和だった頃のシリアののどかな風景や人々の平穏な暮らしがりと、戦乱で破壊された現在の状況や難民となって祖国を脱出する人々を写真で比較し、シリアで友人だった人たちが今どうしているかを述べました。最後に、世界に目を開き将来海外で活動することを期待していると呼びかけ、授業を締めくくりました。重いテーマが小学生に理解しても

らえるか心配でしたが、生徒は講師の話に集中し、質問が止まず、数日後にいただいた感想文集からも、生徒たちがテーマをしっかり受け止めてくれたことを実感しました。



柏市立高田小学校

1月14日(木) 講師 竹花 晃 会員

第2回目の高田小学校では、竹花会員が6年生100名を対象に「ネパールとポカラ国際山岳博物館」の授業を行いました。事前に「海外勤務の動機、海外で働くことの実際」を話して欲しいとの要請があり、講師は現役時代に海外勤務を経験し、JICAシニア海外ボランティアに合格して早期退職してネパールに赴いた体験を語り、途上国への国際協力の意味とJICAの活動を説明しました。続いてヒマラヤの地勢、歴史、多民族国家の実際、宗教、人々の暮らしを紹介し、ネパール伝統の祭り講師の出身地の諏訪の御柱祭との共通点を示しました。

登山家でもある講師は、ヒマラヤの高地で撮影した地形から大

陸移動と地震が起きるメカニズムを詳しく説明し、45分間を目一杯に使った内容豊かな授業に生徒たちは集中していました。



柏市立第八小学校

1月20日(水) 講師 武藤 達雄 会員

第3回目は第八小学校の6年生100名を対象に、武藤会員が「ペルーってどんな国」の授業を行いました。「途上国の人たちの暮らしを少しでも豊かにしたい」という思いで退職後に海外ボランティアを志し、ペルーの高原都市アレキバで職業訓練校の先生たちを支援した経験から語り起こしました。続いてペルーの地理、アジアからペーリング海峡を越えてアンデスに定住したインカの歴史、アンデスに暮らす人たちの様子を紹介し、日本では見られない商売の街頭の刃物研ぎ、体重測定屋、靴紐屋などを示し、クイズ形式でペルー独特の文化を確かめました。

最後に「世界のめずらしい物やいろんな人達と出会って、いろん

な物を発見する為に、なんでも興味を持とう」と呼び掛けました。同期の青年協力隊員の協力で展示したペルーの民族衣装や楽器に生徒たちの目が輝きました。



船橋市立芝山中学校

11月13日（金） 講師 川奈部 くに子 会員

船橋市立芝山中学校 1年生のキャリア教育授業で、川奈部会員が「日本人として地球人として、一度しかない人生をどう生きるか」の授業を行いました。

自らの中学生時代を振り返り、英語と体育が大好きで、その後英文科に進み、中学校教師を35年間務め、ボランティア活動を志して自費でパラグアイに行って1年間ボランティア活動し、その後JICAシニア海外ボランティアとしてパラオで2年間、トルコでも短期ボランティアとして活動した経験を述べました。これらの経験をおして、世界には恵まれない子供たちが一杯いることを知り、それ

を生徒たちに伝えたいと熱く語りました。家庭の主婦として、子供の母として、また日本人として真剣に取り組んでいる姿が生徒たちに伝わる授業でした。



市原市南総公民館 生き活き大学

10月28日（水） 講師 福島 和貴 会員

市原市南総公民館の生き活き大学で、約70名のシニア受講者を対象に、福島会員が「ボランティア活動で訪れたアルゼンチンでの日々」と題して出前講座を行いました。

講義はアルゼンチンの地理・歴史に始まり、日本人移民と日本との外交関係の歴史にふれ、指導を行った水質調査の職場の雰囲気や人間関係について豊富な写真で説明しました。さらに、タンゴの成り立ち、食文化、マテ茶、ワイン、エピータなど、受講者が関心を持つテーマを丁寧に説明し、マテ茶に蜂蜜を入れると「結婚したいという意思表示」という風習など、興味を呼びました。後半で

は、学校教育の問題点やアルゼンチン人の気質について体験に基づいて説明し、最後にボランティア活動で感じたこと、それを日本でどう生かすかを語って講義を締めくりました。



市原市五井公民館 五井楽学塾

12月4日（金） 講師 村田 淑子 会員

市原市五井公民館の五井楽学塾で、94名の塾生を対象に、村田会員が「パラグアイ日系社会に暮らして」のテーマで出前講座を行いました。

予め配布したパラグアイ予習問題（場所や人口など）の答え合わせで和やかな雰囲気を作り、ボランティアを目指した動機やJICAボランティアに応募するまでの経緯を語り、海外ボランティアが身近なもので、やる気があれば誰でも実践できることをアピールしました。日本人の海外移民者がどんな生活をしてきたか、現在どんな生活しているのかなどにふれ、移民者が現地で活躍し尊敬さ

れていること、2世、3世とジェネレーションを重ねても良い文化は残って行くことが実感できたことを熱く伝えました。



八街市中央公民館 生きがい短期大学

2月3日（水） 講師 坂出 直哉 会員

八街市中央公民館の「生きがい短期大学」で第2学年8名

の卒業前の最終授業が行われ、坂出会員が「異国に住むと見えてくる日本文化」のタイトルで出前講座を行いました。講師はパプア・ニューギニアでのシニア海外ボランティア体験を踏まえ、同国の国情、都市と田舎の人々の暮らし、ボランティアの仕事を通して直

面した文化や習慣の違いなどを説明し、異国に住むからこそ見えて来る日本文化の特性についての考察を展開しました。

受講者は海外旅行の経験のない人が殆どで、ニュースで知られることの少ないパプア・ニューギニアの様子、途上国での暮らしの実際やショッキングな体験に驚き、太平洋戦争の痕跡が残る現地の写真にシニア世代らしい感慨を表しました。坂出会員には昨年に続いての講師依頼でしたが、来年度も再講の打診があり、海外経験から日本を見直すというテーマへの期待を感じました。



市原市有秋公民館 雑学セミナー
2月26日(金) 講師 川奈部くに子 会員

たいと語って講義を結びました。講師が持参した現地の衣装・小物の展示やマテ茶の試飲も喜ばれ、内容豊かなセミナーでした。

市原市有秋公民館の「雑学セミナー」で、川奈部会員が「海外で教育ボランティアをして」のテーマで出前講座を行いました。19名のシニア聴講生は、講師の海外ボランティア活動への熱い思いに感嘆し、自費で2度赴いたパラグアイの貧しいながらも明るく陽気な人々の暮らしぶりに聞き入りました。JICAシニア海外ボランティアとして2年間活動したトンガ王国では、親日的な王様の一声で始まった高校の日本語教育、算盤が必須科目であること、東日本大震災の募金活動で示されたトンガ人の日本への感謝の気持ち等を伝え、これからも良き日本人、良き地球人として生き



大学連携授業 大学の正規授業に講師として招かれて授業を担当しました。

麗澤大学外国語学部

11月18日(水) 講師 鈴木伸一 会員

国際協力学科1年生60名を対象に、鈴木会員が「ケニアの生活と健康」の授業を行いました。ボランティアの仕事の紹介に始まり、ケニアの国情、水、貧困、医療、エイズ等の問題を掘り下げ、死亡原因の分析を詳しく説明しました。また講師は、自分が若い頃は引っ込み思案の「オタク」だったが、社会に出て仕事で揉まれ、更に海外ボランティアに挑戦して、その経験を人前で発表できるようになったと語り、若者に前向きな挑戦を訴えました。アンケートに国際協力への関心や青年協力隊志望を記した学生が多数

あり、講師のメッセージが伝わったことが確認できました。



放送大学秋季面接授業

11月8日(日) 講師 鈴木伸一 会員

昨年の授業の好評を受け、本年も鈴木会員に「ケニア共和国の生活と健康」の講義依頼がありました。ケニアの地理、気候、文化、歴史を説明し、1日を1~2ドルで生活する人の割合(貧困率)が高い状況と、それが健康に及ぼす影響を統計資料で示し、未だにエイズの死亡率が高く(29.3%)子供への影響も大きいと、緊急の対策が望まれる現状を訴えました。受講者から海外ボランティアについての質問が多数あり、活発な授業でした。



任 国 事 情 再派遣中の会員・帰国した会員のホットな現地情報です



ヨルダン

ヨルダンの風土と暮らし

中井 邦夫

職種：品質管理 2012年9月～2014年9月

皆さんは中東の国、ヨルダンと言うとどんなことを想像されるでしょうか？ イスラム教の国で酒は飲めない、地下には石油、灼熱の砂漠、そんな想像とは全く異なった国、それがヨルダンです。イスラム教の国ですがキリスト教徒が6%あまりいることもあって、お酒は普通に買えます。美味しいワインを作っているワイナリーもあります。アフリカ大陸を縦断するグレートリフトバレー（大地溝帯）が死海まで伸びていて、国土がプレート境界に位置しているので、残念ながら石油はありません。ヨルダン渓谷と呼ばれる死海周辺の土地は海拔マイナス400mです。暑く、肥沃な土地ではトマトを代表とする野菜や果物が栽培されています。死海の対岸はイスラエル、死海は行き来する船もない、ただただ静寂な湖でした。

首都、アンマンは海拔1,000メートルの高地ということもあって、夏の軽井沢のような涼しいところでした。クーラーを使用するのは夏の盛りの1～2週間程度。直射日光は強烈でしたが、木陰に入ると乾燥した風が吹いていました。10月から雨期に入りますがあまり雨は降りません。時々スコールのような雨が降ってその時は傾斜のある道路を川のように水が流れています。私がいた2年間、冬には大雪が降りました。中東で雪？と思われるかもしれませんがそこらじゅうに雪だるまが作られていました。ヨルダンの天気予報はよく当たります。それはなぜか？隣国イスラエルとシリア、レバノンの天気を見ていればそれが次の日にはアンマンに来るのです。

シリアの内乱はヨルダンの人々の生活に大きな影響を与えていました。ヨルダン渓谷でとれる野菜はシリア経由で東ヨーロッパに輸出

されていたのですが、内乱でその物流ルートが断たれたのです。できたナスをヤギの餌にする写真が新聞に載りました。ヨルダンに逃げてきたシリア難民は当時50～60万人と言われていました。私のアパートの隣人はシリア人でした。でもアンマンでアパートが借りられるような人はシリア人のなかでも富裕層と言えます。多くはヨルダン北部の難民キャンプに収容されていました。キャンプに近い町ではヨルダン人の仕事が難民にとって代わられて大きな社会問題となっていました。

私は毎朝、家の近くのバス停からバスを乗り継いで勤務先の大学まで通っていました。バス停までの道はオリーブ並木で、通りに面したアパートの庭にはレモンやイチジク、ブドウがありました。バスに乗るには往來の激しい道路にかかる歩道橋を渡らなければなりません。横断歩道はありません。家の近くに女子大があり、マダバ方面から通ってくる女子大生たちと歩道橋でよくすれ違っていました。その歩道橋がある日突然、なくなったのです。女子大生達は往來の激しい通りを平然と、車をとめながら強引にわたっていましたが、私にはこわくてとてもマネできませんでした。でも3～4か月後にこれまた突然新しい歩道橋がかかっていました。今考えるといかにもヨルダンらしい出来事でした。



静寂な死海、対岸はイスラエル



ブラジル

ベレンの食べもの

本多 孝治

職種：ソーシャルワーカー 2012年7月～2014年7月

ベレンは赤道から約160キロ南に位置する常夏の地です。サンパウロからは約2,500キロ離れています。イメージ的には大蛇やワニの出るジャングルを想像するでしょうが、それは奥地のことです。

人口は140万人を超え市街地は近代的な建物で囲まれています。最高気温も通年32度前後という所です。しかし朝夕は23度ぐらいです。ということで在任中公式行事以外は背広など着たことはなく、Tシャツと短パンで過ごしました。

食べものは豊富です。又仲間と飲むビールは最高です。なぜあんなにビールがうまかったのだらうと考えますが、やはり「暑い地」のせいでしょう。ベレンでしか食べることのできない代表的な食べ物を紹介します。

1.タカカ： マンジョッカの澱粉にトゥクピーを混ぜ、ジャンプーと干しエビを加えたどろっとした汁状の食べ物。レストランより屋台で

食される料理。クイアと呼ばれる木の実をくり抜いて、半分に割った丸い容器に入れてすりながら食べる。好みてピメンタ・ド・シェイロという、液体又は黄色い実のままの香辛料を加える。日本人には「味噌汁感覚」で食べられる。

2. アサイー：アサイーはアサイー椰子の実で、実をしごいて水を加えてどろとした液状にする。ベレンではこれにファリーニャ・デ・マンジオッカ（マンジオッカ芋の粉末）に混ぜて「食事」として食べる人が多い。ベレン市内には、「アサイー」と書かれた赤い旗を立てて売る店が随所にある。日本でも健康食品として人気が高い。

3. トクピー：トクピーは、マンジオッカ（キャッサバ芋）の絞り汁。そのままでは毒性があるので、香菜や塩、ニンニク等を加えて一度沸騰させたものを使う。この黄色い汁にパット（カモ）の丸焼きを入れ、ジャンプーという噛むと舌が痺れる葉野菜等を加え、1～2時間煮たものがパット・ノ・トクピー。ナザレ大祭の行われる毎年10月の第2日曜の昼食に、一族が集まって食べる習慣がある。これはごはんにかけて食べた最高です。

その他、ペイシャーダ、カウデイラーダ（ナマズと野菜を煮込んだもの）、カラングージョ（蟹）、マニソバ、アイスクリーム（カイルー）もおすすめ。また、日本料理やお寿司屋さんも結構ありま

す。

限られた紙面ゆえ食べものに特化して書かせていただきました。今年にはリオ・デ・ジャネイロでオリンピックが開催されます。4年前はロンドンオリンピックをベレンで観戦していました。遠くて近い国ブラジル。わが人生最高の二年間でした。



ニカラグア

成功！ 大改革

野崎 昌宏

職種：障がい児教育 2013年4月～2014年7月

ニカラグアの養護学校に着任してすぐに校長から言われたことが、「僕たちは障がい児教育についてあまり詳しく知らない。僕たちにどう指導したらよいのか教えてほしい。」であった。

緊張した。この言葉をどう受け止めるかで、自分のこれからの活動がかかってくる。

うーむ！

しばらくの間授業の様子を見せてもらった。比較的軽度の子供たちのグループで、算数やスペイン語の授業を行っていたが、先生方の言葉通り、これは障がい児を対象とした教育ではない。今までこれでずっとやってきたんだと思うと少々悲しくなった。

算数の授業は、ノートに教師の手本を見て数字を書く練習のみ。あるとき、そばにあった積み木を並べて、「いくつ？」と聞いてみた。100以上の数字の練習をしているのに、答えられない。数えられない。すぐに算数の指導を始めた。数えることから始めた。ペットボトルのキャップを使ってまず10まで数える練習をした。それができるようになったら次は5までの足し算。手作りの教材で足し算の概念を教える。現地の先生はそばで見ているアシスタントをして

くれる。日本から持っていった問題のプリントをコピーしてたくさん問題を解けるようにした。子供たちも少しずつできるようになり①のグループでは暗算や指を使ったりして繰り上がりのある計算ができるようになり、さらに2桁・3桁の足し算へと進めることができた。②のグループは10までの計算がようやくできるようになった子供たち。この子供たちも、ペットボトルのキャップや指を使ったりして、自分の力で足し算の問題に取り組むことができるようになった。

この様子を見て、現地の先生方は、どうして障がいを持つこの子たちが足し算を解くことができるのかびっくりしていた。

スペイン語についても同様に、ノートに教科書の初めに出てくる「m」の練習ばかりしていた。mama, ama, amo, など。この「m」が難しくうまく書けない。そのため次の文字に進むことが



積み木を使って足し算を学ぶ

できない。たぶん、ずっとこの「m」の練習をしていたんだろうと思う。「木を見て、森を見ず」の状態で子供たちは「m」以外の文字はほとんど知らなかった。

これを見て、「スペイン語、教えさせてください。」とお願いして担当させてもらった。アルファベットの表を作って、「a」から「z」までを声に出して1時間のうちに20回以上言うようにして、口と耳からアルファベットを覚えるようにした。次に、アルファベットのカードを一人にひとつずつ作って、表を見ながら並べる練習をした。

「i」や「j」、「p」や「q」など似たような文字に戸惑いながらも少しずつ自分の力で並べられるようになってきた。並べ終わったら、また音読。受け持った児童のほとんどがアルファベットを覚えることができた。単語が読める子も出てきた。

このように、それまでとは全く違う指導法を先生方に見てもらい、実践してもらった。

「子供たちはできる力を持っていることを信じて」

Muchas Gracias!

フェスティバル

地域の国際交流フェスティバル参加のレポートです

かしわde国際フェスタ2015

2015年9月27日 於：柏駅前ハウディモール

9月27日（日）11時半～15時半、柏市国際交流協会主催、柏市共催の「かしわde国際交流フェスタ2015」が柏駅東口ハウディモールで開催され、12団体が活動紹介や物品販売を行いました。前夜からの小雨は会場設営中に上がり、開会前から人だかりがふくらみました。当会はパネル展示、資料配布と国際理解クイズを行い、及川、白鳥、加藤、黒田、羽田各会員が切れ目のない来場者に対応しました。国際理解クイズに40名を超える参加者があり、景品の品切れが気懸かりでした。JICAボランティア活動に関心のある人の質問に加え、当会の活動につこんだ意見を下さる方もおられ、有意義な意見交流の場でもありました。



国際理解クイズに挑戦

成田市国際市民フェスティバル2015

2015年10月4日 於：成田市国際文化会館

10月4日（日）10時～15時、成田市国際文化会館で開催された「成田市国際市民フェスティバル2015」に参加しました。台風の雨にたたられた昨年とは違って変わった秋の好天に恵まれ、40団体が参加して各種の催し物やパフォーマンスが行われ、市内小中学校が翌月曜日を振替休日にして生徒の参加を促した効果もあり、会場は大変賑わいました。当会はブースでパネル展示、資料配布と国際理解クイズを行い、酒井、津田、村田の3会員が来場者の対応に当たりました。国際理解クイズは76個の景品の品切れになるくらい子供達で賑わいました。



ここでも大人気の国際理解クイズ

ちば生涯学習ボランティアフェア2015

2015年11月17日～23日 於：千葉市生涯学習センター

11月17日（火）～23日（月）、千葉市生涯学習センターで行われた「ちば生涯学習ボランティアフェア2015」に当会はブース展示で参加し、1週間にわたる開催期間中役員が交代でアテンドしました。展示コーナーには当会の他様々な活動分野の15団体が参加し、実演や体験紹介、ボランティアの先生としてのPRが行われ、参加者の間での情報交流がありました。当会ブースでは会員の海外でのボランティア活動や帰国後の活動を紹介する写真と当会が主催する公開講演会のパンフレットを左右対称に展示し、スマートなブースデザインが目を引きました。



スマートな当会のブース

ちば市国際ふれあいフェスティバル2016

於：千葉市きぼーる（2016年2月14日）

2月14日（日）10時～15時、千葉市きぼーるで「ちば市国際ふれあいフェスティバル2016」が開催され、24団体が参加して「世界の輪 Chibaから世界へ広げよう！」のテーマで各種の催しやステージライブと模擬店で賑わいました。当会はブース展示で参加し、酒井夫妻、村田の3会員がアテンドしました。ブースでは写真パネル展示、各種資料の配布、JICAボランティアの応募相談と国際理解クイズを行いました。今回の催しに合わせて内容を一新した国際クイズには50名の参加があり、大人、子供夫々新しい設問へのチャレンジを楽しんでくれました。JICAボランティア募集に関心を示した3人の方に応募要項をお渡しして詳しく説明し、内1名は2月25日の帰国報告会に来場されるとのことでした。



新しい国際理解クイズが今回デビュー、改定した設問への反応は上々でした。

国際理解クイズが新しくなりました！

各地のフェスティバルで人気アトラクションとなっている当会の「国際理解クイズ」ですが、時代の流れと共に陳腐化した設問が目立つようになり、役員有志が知恵を絞って内容を一新しました。



フェスティバル以外にも出前講座や近隣の集まり等で活用を増やしたいと思います。貸し出しのご用命は当会事務局にご連絡ください。

皆さん、満点とれますか？（回答は最終ページに）

子供向けクイズの例：

- ・地球上で日本の裏側にある国はどこでしょうか？
①イタリア ②オーストラリア ③ブラジル
- ・世界中で小学校に行けない子供は何人いるのでしょうか？
①6700人 ②67万人 ③6700万人

大人向けクイズの例：

- ・世界の宗教で一番信者数が多いのは何教でしょうか？
①キリスト教 ②イスラム教 ③仏教
- ・世界全体でHIV陽性の総数はおよそどのくらいでしょうか？
①40万人 ②400万人 ③4000万人

ウェブサイト 30,000アクセス達成と地域別SVレポートについて

ウェブマスター 白鳥貞夫

2016年2月3日、当会のウェブサイト（ホームページ）のアクセスカウンター表示が30,000に達しました。



2006年秋にホームページ運用が始まり、2010年7月16日に10,000回、2013年1月21日に20,000回、それから3年と13日で30,000回に届きました。1日平均9回のアクセスがあった計算ですが、実は当サイトへの実際のアクセスはその7倍あるのです。

カウンターは表紙ページへのヒットを数えているだけで、サイト内の各ページに直接アクセスした場合はカウントされません。例えば、検索サイトで「シリア」を検索した人が、当サイト内の「シリア」というキーワードを含むページを見つけて閲覧した場合、表紙ページを経由しないので、カウンターは回らないのです。

サイト管理者はサイト全体のアクセス統計を入手できますが、それによれば、当サイト全体では1日平均約65件のアクセスがあり、その大半が地域別SVレポートの投稿記事です。よく読まれたページの統計を見ると、国際ニュースに反応した人がその国の情報を

会員の海外ボランティア活動・異文化体験レポート

地域別 SVレポート	アジア 地域	中東 地域	アフリカ 地域	大洋州 地域	中米 地域	南米 地域
------------	--------	-------	---------	--------	-------	-------

得るためにネット検索し、当サイトの記事にアクセスしたことが分かります。例えば、天皇皇后両陛下のパラオご訪問時に「パラオ」の記事閲覧がわっと増え、ネパール大地震では「ネパール」の記事閲覧が急増しました。この現象から、会員のSVレポート投稿で海外ボランティア活動の成果が世に活かされ、当サイトが社会貢献の場の一つになっていると言えるのではないのでしょうか。

この機会に、会員には地域別SVレポートへの投稿をお願いします。近年帰国した会員はもちろん、派遣中の会員も気軽にメールで記事をお送りください。投稿ガイドラインが会員専用ページにありますが、多少の基準外は相談に応じます。

一般読者には、地域別SVレポートを情報源としてご活用いただき、その地域の話詳しくお聞きになりたい場合は、お気軽に当会にお声をおかけくだされば、現地でボランティア活動した会員をミニ出前講座の講師として派遣します。ご連絡をお待ちします。

JICAボランティア千葉県庁表敬訪問

千葉県出身の青年海外協力隊（JOCV）とシニア海外ボランティア（SV）の帰国・派遣前の県庁表敬訪問は、6月24日、9月18日、12月22日に行われ、鶴巻総合企画部長他の激励を受けました。今年度最終回は3月16日に行われる予定です。

当会は県庁表敬の終了後に毎回30分間の帰国・派遣前SVを対象にした広報活動を行い、同時に入会勧誘も行いました。その結果、今年度は12名の新しい会員を迎えることができました。新旧ボランティアによる年4回の県庁表敬訪問は、JICA東京国際センターの協力もあり、当会にとってもきわめて重要な機会と

なっています。



12月22日の表敬訪問

JICAボランティア春募集説明会

シニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の春募集が4月1日から5月9日まで行われます。千葉県内では次の通り募集説明会（体験談&説明会）が開催され、ボランティア経験者による体験発表や個別相談もあります。両日ともシニア海外ボランティア、青年海外協力隊を合同で行います。申し込み不要・入退場自由ですので、興味のある方は直接会場にお越しください。

JICAボランティア春募集説明会：

- 4月9日（土）14:00～16:00
船橋フェイスビル 6階 きららホール
（JR船橋駅南口、京成・東武各線船橋駅 徒歩1分）
- 4月24日（日）14:00～16:00
千葉商工会議所 14階 第一ホール
（JR総武線千葉駅、京成千葉中央駅より徒歩10分）

JICA千葉デスク便り

「グローバルキッチン」のご案内

JICA東京は、青年海外協力隊千葉OB会と共催で「グローバルキッチン」を実施しております。これは、青年海外協力隊経験者や在日外国人が講師となり、現地の文化紹介や調理実習を通して、世界の食文化について学ぶイベントです。

2015年度は海外に伝える千葉の伝統料理をテーマに、すでにパラグアイ、ベトナム、タンザニア、フィリピン、ブータン、海外に伝える千葉の伝統料理をテーマに、計6回を実施しました。2016年度も引き続き実施予定ですので、異文化や国際協力に興味のある方は是非ご連絡ください。（本イベントは、材料費として、1回1,000円から1,500円の参加費をいただいております。）



JICA千葉デスク 和泉澤 浩 TEL: 043 - 297 - 0245
E-mail: chiba-desk_izumisawa@friends.jica.go.jp

編集後記

吾会が青年海外協力隊発足五十周年記念式典で天皇陛下の表彰を受けた。千葉に住む友人から忘年会にそのことを言われて、改めてこれまで尽くしてきた先人たちへの感謝の気持ちが深まった。「楽観論者はドーナツを見る。悲観論者は穴を見る。」オスカー・ワイルドの言葉である。私たち編集者の仕事は後者である。欠落などはもちろんのこと、丁寧語、文字の大きさ、斜体、送り仮名やスペースなど細心の注意で校正を何度も行う。その結果が出来あがった。さて、大苦勞の末、編集者諸氏は胸を張ってドーナツを見る事が出来るか。（渡邊要吉）

主な行事予定

- 当会開催・参加予定の行事です。奮ってご参加ください。
- 第21回公開講演会 および 平成28年度通常総会
5月7日（土） 千葉市国際交流プラザ
 - 浦安市国際交流・協力フェスティバル2016
5月8日（日） JR新浦安駅前広場
 - 第21回帰国報告会
7月30日（土） JR海浜幕張 コアホール（予定）
 - かしわde国際フェスタ2016
9月25日（日） 柏駅前 ハウデモール